

令和7年度秋田県総合政策審議会第3回教育・人づくり部会 議事要旨

1 日 時 令和7年9月1日（月）午後1時30分～午後2時50分

2 場 所 議会棟 大会議室

3 出席者

○委員 高橋 今日子（東京大学大学院新領域創成科学研究科特別研究員（R P D））

長谷川 兼一（秋田県立大学システム科学技術学部教授）

和田 渉（秋田大学大学院教育学研究科教授）

○専門委員 清水 隆成（秋田県P T A連合会会長）

野内 友規（聖霊女子短期大学生活文化科教授）

□県 久慈 隆正（秋田県教育庁次長） ほか関係課室長等

4 開 会

5 議 事

●和田部会長

次第に沿って議事を進める前に、皆様に一言申し上げる。部会における審議内容は、議事要旨としてウェブサイトに掲載される。その際に委員名を伏せる必要はないと思われる所以、公開することを考えている。それでは、本日が最後の会議となるので、よろしくお願いしたい。

議事(1) 「教育・人づくり部会の提言について」

●和田部会長

それでは議事に入る。最初に、教育・人づくり部会の提言について、事務局から説明をお願いする。

□鈴木総務課企画チーム副主幹

資料1から資料4について説明。

●和田部会長

ただいまの事務局の説明について、何か質問はあるか。よろしいであろうか。

それでは次に移らせていただく。これから意見交換を始めるが、最初に、お手元の資料4を御覧いただきたい。資料4は、部会でいただいた主な御意見を事務局で提言書の素案として整理したものである。

本日はこの資料をたたき台として意見交換を行い、提言書をまとめていきたいと思う。皆

様から提言にかかる内容のほか、文言の修正、追加、あるいはニュアンスが異なるといった点について御意見をいただきたい。

一つの提言についての時間の目安は 20 分程度でお願いする。それでは最初に、提言 1、1 ページと 2 ページについて御意見をお願いする。

○長谷川委員

もう少し早く尋ねればよかったのだが、資料 3 について、他の部会からこの部会に対して御意見をいただいていると理解している。この資料 3 の取り扱いについて確認したい。

□鈴木総務課企画チーム副主幹

資料 3 については、おっしゃるとおり他部会からの御意見となっている。こちらについてもこの場で御確認いただき、教育・人づくり部会の提言として盛り込むべきと判断されるものについては、提言に盛り込むことになる。

●和田部会長

承知した。高橋委員、お願いする。

○高橋委員

まず全体的な感想であるが、これまでの議論を踏まえた、非常に積極的な文言が多く盛り込まれていると感じた。ほかの県の教育に関する政策内容と比較しても、現段階でここまで明確に記載されていること、そして我々が出した意見がこれほど反映されていることに、良い意味で驚いた。議論の結果をよく聞き取ってくださったと感じながら拝読した。

その上で、1 点目の提言に関してだが、改めてこの「背景」と「提言」がきちんと連携しているかを確認した方が良いかと考えている。

例えば、「子どもたちが社会をたくましく生き抜く力を育みたい」というのが大きなメッセージであると思うが、その力が提言のどれとどれにつながっているのかを改めて見ていくといった作業である。

また、「グローバル化が進み社会が複雑化する現代」とよく言われるが、グローバル化の話は提言(3)に入っている一方で、「社会が複雑化すること」については提言のどこで触れられているのかといったように背景と提言を整理し、背景で並べる順番も含めて連携するよう整理できると、なお伝わりやすくなるかと思う。

最後に、「防災・減災・県土強靭化ワーキンググループ」からの御意見であるが、防災に対する意識をさらに高める必要はあると思うが、これを教育と結び付けるのは、学校教育の中でというよりは、少し違うのではないかと見ていた。

この防災ワーキンググループの方にどのように返答すべきか分かりかねるが、今回の提言には、ひとまず含めなくても良いのではないかと考えている。

●和田部会長

ほかにあるか。

○長谷川委員

私も高橋委員と同様に、ここでの議論が直接的に汲み取られ、うまく反映されているというのが率直な感想である。一点だけ気になったのが、A Iというキーワードについてである。

本文書中には「A I技術」、「A I」、「A I等」、「生成A I」といったように、A Iに関連する言葉が複数、異なる表現で用いられている。

「A I」と「生成A I」は全く異なるものだと思うので、もし意図があって使い分けられているのであれば問題ないが、言葉の整理として、「技術」を付けるのか、単に「A I」とするのかといった点を明確にされた方が良いかと思う。

●和田部会長

事務局、よろしいか。

□鈴木総務課企画チーム副本幹

ただいま、長谷川委員から御意見があった点については、内容等を確認しながら、言葉の使い方についても精査させていただく。

●和田部会長

では、ほかにあるか。清水専門委員。

○清水専門委員

先ほどの防災の話であるが、これは「たくましく生きる」という部分にも関わると思うので、もし含めるのであれば、そこに入れても良いかと感じた。

また、いただいている案件として、「早い段階からのキャリア教育」は私も非常に大事だと考えている。この1ページ目の提言1の中に「事業を創造する力」という文言が入っているので、「社会の一員として働く」という視点もここに入れられるのではないかと思う。

私が最も良くないと感じるパターンは、特に目的もなく高校を卒業したからという理由で進学して東京へ行き、戻ってこないというものである。中学校を卒業して働いても良い、高校を卒業して働いても良い、そして働くことで世の中の役に立つという認識がまだ足りないようを感じる。

学ぶことは素晴らしいが、「なぜ学ぶのか」といえば、社会の一員となって社会を動かしていくためだと考えるので、学んでいることは社会で働くことにつながっているという点を伝えていくべきであると思う。

●和田部会長

ほかによろしいか。

○野内専門委員

私も高橋委員と全く同じ感想で、拝見したときに非常に驚いた。他のものと比較してみるとよく分かると思うが、良い意味で驚いた。

「人づくり」においては、人をどう育てていくかという点に焦点が当たらなければならぬ。例えば「確かな学力」を前面に押し出すと、どうしても人づくりではなく学力向上が目標であるかのような印象を与えかねないが、今回の素案では、どのような人を育てていけば良いのかという点がより明確化されており、素晴らしいと思った。

詳細については、また後ほど発言させていただく。

●和田部会長

それでは次に移らせていただく。提言 2 についてお願いしたい。

○長谷川委員

言葉の使い方として、提言(1)の二つ目の項目、「教員の I C T 活用云々」の最初のポツにある「生成 A I の倫理的」という言葉について、この「倫理的」が意図するところが少々読み取りにくいと感じた。それが 1 点目である。

もう 1 点は、提言(2)の「教員の魅力を体験できるインターンシップ制度」という提案についてである。教員免許を取得するためには、本学では 1 年生の時から教職課程のカリキュラムが始まり、科目を履修するプログラムが組まれている。このインターンシップを例えれば大学生に課すとすると、タイミングが問題になる。学生たちは大学 3 年生の今の時期から就職のためのインターンシップを始めるので、その段階で学校現場でのインターンシップを体験することは可能であるが、教員免許の取得につながるタイミングとはかなりずれがある。

制度としてこれがうまく機能するかという観点では、少しタイミングがずれるのではないかと思った。

ただ、このような職業があるという認識を高める意味では、非常に魅力的であるので、そうした位置づけであれば結構ではないかと思う。

しかし、最初に「教員不足」を掲げている以上、教員免許を取得して教員になってもらうという目的からすると、このインターンシップとの時間的なズレがどうしても生じてしまうため、その点を表現としてうまく処理しないと、制度としては成り立ちにくいのではないかと感じた。以上 2 点である。

●和田部会長

この「倫理的」な点について、補足説明は可能か。

□鈴木総務課企画チーム副主幹

この「生成AIの倫理的」な活用という点は、確かに荒木委員の御発言だったと記憶している。本日、御欠席のため確認できないが、私のほうで確認させていただきたいと思う。

○長谷川委員

意図が直接的に伝わるような言葉遣いが望ましいと考える。様々な解釈が可能であろうが、提言としては、伝えたいことを端的に表現した方が良いかと思う。

○高橋委員

その点はおそらく荒木委員の御発言かと思うので、本人に確認いただくのが良いかと思うが、生成AIの使用に当たっては、剽窃（plagiarism）の問題、例えば安易にコピー＆ペーストをしない、また引用を明記するべきといった御意見だったと記憶している。

「倫理的な使用方法」というとそちらを思い浮かべがちであるが、今の話を聞いて思ったのは、使う主体が小・中・高校生であり、例えば自分の子どもがあらゆる制限を突破して不適切なコンテンツを見てしまう、といった類いの「倫理的」な問題と捉えられる可能性もあるということである。長谷川委員の提案は、誤解がなく、かつ的確な表現にすべきということとかと拝察する。

○長谷川委員

生成AIはツールであるから、子どもたちもどんどん使うべきであり、そういう時代になると思う。むしろその向き合い方、使い方をきちんと教えるべきである。

例えば、生成AIの回答をそのまま自分の意見として表明しないようにする、生成された文章を自分なりに噛み砕いて表現するといった使い方を教育の場で教える必要があり、大学でも今まさに取り組もうとしているところである。

それは高校生、中学生、小学生にも、程度の差はあれ必要になってくる時代ではないであろうか。そういった意味での「倫理的」ということであれば良いと思っていた。

また、文部科学省のガイドラインでは、確かに小中学生がAIを使う際には保護者の同意が必要だったと記憶しているので、そういった意味での「倫理的」とも考えられ、この言葉が持つ意味の幅が広いため、もう少し端的に、ここで伝えたいことを表現した方が良いのではないか、ということである。

○高橋委員

親の同意については、確かに同意して使わせているものの、それをかいくぐっているときもある。生成AIが何たるか、そして安全に使うためのルール、さらにはその特性を理解する必要がある。

生成AIが提示するものが必ずしも正しいわけではなく、引用元が明記されているわけでもないので、あれは完全な情報ではないということを教えるべきである。

さっと調べるには良いが、きちんと裏付けを取る必要がある、といったところまで含めてあると思う。

どの点に注力するのか、あるいはそのすべてについて記載するのであれば、そのあたりを認識した上で記述する必要があるだろう。

○長谷川委員

「倫理的」という言葉は使わずに、「生成AIの使用方法」や「向き合い方」といった表現にした方が良いのかもしれない。

○清水専門委員

「適切な」という言葉を入れるのも良いのかもしれない。

○長谷川委員

提言としてはその方が良いかもしれない。

○高橋委員

教員の安定的な確保に関する今のは話であるが、長谷川委員がおっしゃったように、「教員という仕事はこんなに魅力的なんだ」ということを伝えたいのであれば、ターゲットは高校生や中学生になるはずで、夏休み中のインターンシップといった形で構成されると思う。

あのとき、どのような話であったか定かではないが、大学生に関しては、県外にいる大学生で教員志望の方に、秋田の高い学力を生み出している現場を見てもらい、秋田の採用試験を受けてもらうためにインターンシップで来てもらう、という話であったかと記憶しているが、定かではない。もし、そういう趣旨なのであれば良いようにも思う。どのような方向性で進めたいのか、ということである。

○長谷川委員

今の話であると、その方向で進められるかと思うが、この文章でその意図が汲み取れるかどうかはまた別の問題かと思う。

□鈴木総務課企画チーム副主幹

荒木委員の御発言であったかと思うが、今、高橋委員がおっしゃったようなニュアンスだったと記憶している。この文章で伝わりにくいということであれば、再度、発言や議事録を見直しながら、もう少し伝わるように修正するので、御意見をいただければ大変ありがたい。

●和田部会長

私からもよろしいか。教員不足は本当に深刻な問題である。この提言の中で最も重要なのは、「例えば」と付いている部分ではなく、その前段の「従来の発想にとらわれない新たな取組の検討」を教育委員会にしてほしいということである。

これまで様々な施策を積み重ねてきているが、その効果をしっかりと検証し、それでもまだ不十分だということであると思う。

全国規模で教員不足が問題となっている中で、我々が取るべき施策は、「教員という魅力的な仕事をアピールしていく」という一つの流れと、もう一つは「故郷を愛し、秋田という我々の郷土のために、また次の世代を育てるために秋田で教員をやりたい」という、より地域に根差した視点、そのどちらに力点を置くべきか考えてほしい。

先日の企画部会でも、秋田県の人口減少が大きな課題として話されていたが、教育が直接的にその問題にアプローチするのは少し難しいと感じながら聞いていた。

であるから、「教員という魅力的な仕事」として、秋田にいても全国どこへ行っても通用するという考え方で良いのか、それとも、「全国の中でも特に秋田県の状況は深刻なのだから、秋田県としてどうするのか」という視点を持つべきなのか。そういった意味も含めて、「従来の発想にとらわれない」と受け止めて考えてはどうであろうか。

ほかにあるか。野内専門委員どうぞ。

○野内専門委員

提言(1)の「主体的・対話的で深い学び」の箇所の、「AIやデジタル技術にはない人間固有能力である『共感力』と『想像力』」という部分についてであるが、この「想像力」は、現在の表記でも良いとは思うが、作り出す方の「創造力」にする、あるいはイノベーションまで含んだ意味合いを持たせる方が良いのではないか。

浅いレベルの想像力の範囲であれば、今やAIでもかなり模倣することが可能である。もう少し先に進んだ、イノベーションまで含む「創造力」という言葉にした方が、子どもの力を伸ばす余地があり、より深く考えられるようになるのではないかと思った。

●和田部会長

最初の丸にある「想像力」は、荒木委員がおっしゃったイマジネーション(Imagination)の方である。

○野内専門委員

もう少し、イノベーションまで含んだ「作り出す」方の「創造力」にすることで、子どもたちが社会に出たときに、秋田から新しいものをどんどん生み出していくという点にもつながってくる。ただ想像するだけでなく、作り出して社会貢献までするという、将来を見据えた言葉にした方が、より意味があるのではないかと感じた。

●和田部会長

野内専門委員の意見はよく分かる。この点は荒木委員と調整して進める。

●和田部会長

それでは、次に進める。4ページの提言3についてである。こちらも少し時間を持ってから御意見をいただきたいと思う。

○高橋委員

この提言3であるが、一つ大きな鍵となるのは、「地域」と「学校」、そして「子どもたちや保護者」という三者の関係性の話ではないかと考えている。

「部活動の地域展開」はその最も分かりやすい例で、地域展開と言ったときに、地域のどこに、誰に、また交通手段もそうであるが、どういった場所にアクセスしながら、といったように地域を意識しながら教育環境の構築を考えることが、結果的に子どもたちの健やかな心身を育む教育環境の実現につながるという話ではないかと理解している。

提言3はそうした大きな枠組みの中にあるとえたとき、不登校支援についても同様のことが言えると思う。学校と生徒という関係性の中だけで不登校の状況を改善したり、学びを止めないように様々な対応を考えたりすることには限界がある。

この部会での議論にも挙がったが、オルタナティブスクールやフリースクール、あるいは地域における不登校支援といった、学校の少し外側にある場所へ子どもが出ていき、地域の人たちと何か一緒に手を動かしたり頭を動かしたりして「楽しかった」と感じて家庭に戻ってくる。それは学校とは違う形であるが、学び続けることによって結果的に学びの流れから途切れずに成長を続けるという事例が、不登校支援の話を聞いたり、実例を見たりすると多くある。

提言(2)の最後のポツに、例えば「多様な背景を持つ児童生徒の一人ひとりの心理や特性について、地域側や教員が理解を深めるための学びを一層深める」といった形にしておくと良いのではないかと思う。

例えば五城目町では、「みんなの学校」に来る子どもたちや、小学校には行かないけれども、新しくできたデジタルテクノロジーセンターには来る子どもたちがいる。彼らは朝市で買い物をし、地域のおじいちゃん、おばあちゃんと話すことで、地域に受け入れられているという感覚を持ちながら、心が安定した状態で育っていく環境がある。そういうニュアンスがこの提言の中に入ると、この提言3全体の大きな形が定まるのではないかと感じた。

●和田部会長

ほかによろしいか。清水専門委員、お願いする。

○清水専門委員

提言(2)の二つ目のポツであるが、「インクルーシブ」という言葉の使い方が、ここではあまり合っていないように感じる。この言葉は、もっと性別や国籍など、すべてをひっくるめて「インクルーシブに」という文脈で使われることが多いと思う。「学校の課題とは別の個人の興味に基づく多様な学びにも価値を認める」という内容と、「インクルーシブな考え方」というのが、一般的な使われ方としてはつながりにくい気がする。提言全体を通してインクルーシブであるべきというのであれば分かるが、この箇所に限って言えば、少し違うのではないかと感じる。

●和田部会長

どのような表現が良いか、専門である教育庁にお答えいただきたい。

□小山特別支援教育課長

このポツの文脈であると、「ダイバーシティ」というようなニュアンスの方が、より範囲が限定されるであろうか。

「インクルーシブ」というと、ダイバーシティとどのように住み分けをしたら良いのか、という議論になるかと思う。

○清水専門委員

私が発言した意図としては、勉強は得意ではないけれど学校には行っている、しかしあまり居場所がない、と感じているような子もいるので、その子が得意なことを見つけて評価してあげられるような機会があれば良いという話であった。

学校内では、どうしても勉強ができることや足が速いことなどに偏りがちであるが、それ以外に得意なことがある子どももいるはずで、そうした点を認めてほしいという思いからである。

□小山特別支援教育課長

その文脈であると、ここに「インクルーシブ」という文言を入れない方が適切かもしれない。

○清水専門委員

全体を通じてインクルーシブであることは良いのだが、このポツに関しては少し違うかと思う。

□小山特別支援教育課長

「多様な価値観」という言葉が近いであろうか。

○清水専門委員

そうである。

勉強も部活動も苦手で、学校に居場所がないと感じている子どもたちが、「これなら自分にもできる」と自信を持てるような、多様な選択肢を用意することが大切である。勉強やスポーツ以外に認められる分野を学校内に作ってあげることで、学校に行きやすくなり、学校での存在感も出しやすくなるというイメージである。

□小山特別支援教育課長

そういった意味では、委員の御意見と同じである。

●和田部会長

では、適切な表現にするとどうなるであろうか。

□鈴木総務課企画チーム副主幹

今の清水専門委員の話と、特別支援教育課長の意見を踏まえながら、事務局の方で考えさせていただきたいと思う。

○高橋委員

「インクルーシブ」というと、最近は「ダイバーシティ＆インクルージョン」という形でよく使われる。二つの言葉は真逆に近い言葉だが、多くの場合、一緒に使われているため混乱を招いている。

インクルーシブ教育を研究されている先生に「結局、何と言い換えたらいですか」と尋ねたところ、「簡単に言うと『ケア』と近い」とおっしゃっていた。ダイバーシティな社会では当然、多様な人がいるので衝突や対立も起こり得る。インクルーシブが目指すのは、多様な状態になったときに、それをお互いに認め合い、気づき合い、見守り合うことで、それを一言でいうと「ケア」ということになるそうである。インクルーシブについては、そうした理解の方が良いかと考えている。

それを踏まえると、この二つ目のポツで言いたかったことは、清水専門委員の話から、おそらく「寛容性」の話であったのではないかと拝察した。

多様な学びにも価値を認め、様々な子どもが気持ちよく過ごせる寛容な学校や社会を築きたい、というところが趣旨であったのではないかと聞きながら思っていたが、もし違ったら申し訳ない。

○清水専門委員

もっと端的に言えば、「そんなことができるなんてすごい」と評価してくれる学校になっ

てほしいということである。

例えば、ポケットモンスターの名前をたくさん知っていることでも良い。実はすごい特技があるということを、もっとみんなで認めてあげる雰囲気、肯定してくれるような学校であってほしい。「そんなくだらないことをしていないで、英単語でも覚えなさい」というような風潮は望ましくないということである。

●和田部会長

様々な人が様々な行動を取ったときに、それを価値付けてあげれば良いということで良いか。

○清水専門委員

「すごいな」という感じである。

●和田部会長

価値付けだけでは足りないであろうか。

□小山特別支援教育課長

非常によく分かったので、その趣旨で文言の整理をさせていただきたい。インクルージョンは確かに「包摂」という意味で、ダイバーシティ、つまり多様なものを包摂していくという考え方であるが、今の議論であると、また少し別の単語が当てはまる可能性もある。

●和田部会長

一旦、こちらでお預かりさせていただければと思う。

ほかにあるか。野内専門委員、お願いする。

○野内専門委員

先ほどインクルーシブの話が出たが、私はインクルーシブ教育を専門に研究しており、おっしゃるとおり、ダイバーシティは多様な価値観を持った方が同じ場所にいられるという段階までを指す。

一方、インクルーシブは、先ほど高橋委員がおっしゃられたように、その中でいかにお互いが幸せに過ごせるかという点まで突き詰めた、ケアの概念も含む考え方である。

私からは、提言(2)の最後の項目、「多様な背景を持つ児童生徒一人ひとりの心理や特性について教員が理解を深めるための機会を一層充実させる必要がある」という文言についてである。これは、これから具体的に実践していく上で、非常に重要になると個人的には考えている。

その理由として、特別支援教育で向き合っている問題は、そのまま高齢化社会の問題につ

ながってくるからである。

例えば、目が見えない、耳が聞こえない、体が不自由であるといった、特別支援学校の子どもたちが向き合っている問題に、先生がしっかりと目を向け、それを社会の中で実現していくことで、高齢者も住みやすい社会をそのまま創ることができる。

これは個人的な願望ではあるが、是非、特別支援を巻き込んで取り組んでいただけだと、一気に進展するのではないかと感じている。

●和田部会長

長谷川委員、お願いする。

○長谷川委員

提言(1)についてであるが、私も子どもの部活動の送迎を、長年身をもって体験してきたが、ここで書かれている「環境を整備していく」という提言内容は、見方によっては交通インフラの整備と捉えることもできる。

この部会として施策を展開していく際に、このように記載することでインフラ整備を期待されないと受け取られても良いのか、あるいは制度や仕組みを「環境」と捉えて整備していくということなのか。

確かこれは清水委員が自転車での移動を提案されたかと思うが、それであればインフラ整備とは異なるので、言葉の使い方として、その点が気になった。

●和田部会長

この点については検討する。

私からよろしいか。正直なところ、教育委員会は困るのではないかと懸念している。なぜなら、部活動の地域展開における移動手段の確保や、不登校の子どもたちが通う教育支援センター、これからできる学びの多様化学校、フリースクールなどへのアクセスが問題となるからである。

私自身、ある基礎自治体の不登校対策委員を務めているが、最も大きな障壁となっているのが、自宅から教育支援センターまでが遠くて通えないという問題である。

仮に学びの多様化学校ができたとしても、「行きたいけれど交通手段がない」という状況が考えられる。その際にどうすれば良いのかという点で悩んでいるのが実情である。

おそらく県教育委員会としては、市町立学校に関しては「それは基礎自治体で考えることです」というスタンスになるかと思うが、それではこの提言は実行可能なものになるのかという点が心配である。

自宅から遠いのでオンラインでというのではなく、本当は校内の支援センターであれば行けるのに、その学校 자체が遠くて通えないという状況がある。

これは、特に過疎地域を抱える秋田県にとって非常に深刻な問題である。もう少し踏み

込んだ対応が必要ではないかと考えるが、難しい課題であるとも認識している。

バスのチャーターが良いのか、タクシーを利用すべきか、その際にまた提言しなければならないが、それだけの財源があるのかという問題もある。

そのような地理的な状況があることを踏まえながら、本当に実行していかなければならぬのではないであろうか。この点についてはいかがであろうか。野中保健体育課長、お願いする。

□野中保健体育課長

現在、地域移行における交通手段は、全国的に大きな課題となっている。

清水専門委員がおっしゃるとおり、自転車という発想もあるが、秋田では冬期間の問題がある。また、以前、北秋田市でバスを運行した事例では、鷹巣での活動のために合川などを巡回したそうであるが、合川駅を起点にしたところ、保護者の方々が「合川駅まで送るなら鷹巣まで送る」とおっしゃり、結局バスに乗る子どもがいなかったということもあった。

地方では、きめ細かく巡回しない限りカバーできないという現実や、タクシーを活用している都府県の事例もある。

現在、非常に大きな課題であるので、他の好事例を参考にしながら模索していきたいと考えている。

○清水専門委員

就労継続支援B型事業所などを運営している方と話す機会が多いのだが、秋田市内で事業を行っている方は、利用者が自力で通ってくれることが多いものの、市外になると送迎が前提になると聞く。

そうなると、行政施設にても、自力で通えない場合は送迎を前提にしなければ成り立たぬのではないであろうか。小学校が統合されればスクールバスを出すのが当たり前になるように、施設の設置と送迎はセットで考えるべきではないかと思う。

もちろん財源など様々な問題はあると思うが、結局、子どもが自力で行けない距離に施設がある以上、通うことはできないので、そうだとすると車で送迎するしかないという結論に至る。よって方法論を議論するよりも、どうやって実現するかを考えた方が良いのではないかと思う。

●和田部会長

ほかによろしいか。では、提言4に移る。5ページである。

高橋委員、お願いする。

○高橋委員

施策名称が「誰もが生涯を通じて学び活躍できる環境の構築」となっているが、「生涯を

通じて学ぶ」という要素は随所に盛り込まれていると感じる一方、「活躍できる」という部分があまり反映されていないように感じた。

必ずしも大活躍しなくても良いとは思うが、「学び、活躍できる」という言葉には、学んだことを通して心豊かに、生き生きと暮らせる環境づくり、といったイメージも含まれていると理解している。もし「活躍できる」という要素を入れたいのであれば、何かしらの形で盛り込んだ方が良いのではないかと考えている。

他の部会である「未来創造・地域社会部会」から提案された内容は、まさに活躍するような人材を育成するキャリア教育の話であったので、もし盛り込むとすれば、彼らの意見をここに少し加える形になるかと思う。この「活躍できる」という部分のイメージをもう少し御説明いただき、より解像度を上げられればと思うが、いかがであろうか。

○野内専門委員

高橋委員がおっしゃられたことは、非常に重要であると考える。高齢者の方が「学ぶ」とはどういうことかを考えたとき、先日、横手のふるさと村でカブトムシ展が開催されており、シルバー人材センターの方々が非常に生き生きと活動されていた。

私の3歳の息子がそこで色々な質問をするのだが、シルバー人材センターの方は答えられることもあるが、答えられないこともある。答えられない場合は後で調べてきてくださるなど、やはり「活躍できる」という社会とのつながりを作つてあげることが、学習意欲の向上につながるのだと強く感じた。であるので、ここに「活躍できる」という視点を入れることは、非常に重要なポイントであると私も思う。

○清水専門委員

その「活躍」という視点は非常に大事で、「お前はすごいな」と言われることが、生きる上での最大の喜びの一つではないかと思う。

私たちが若い頃は、路上ライブをしている人などが駅前によくいたが、最近はあまり見かけない。規制が厳しくなったのか、やりたい人自体がいないのか分からぬが、この提言の中に「県の施設の外壁をキャンパスに見立てた政策」というものがあるので、例えば「ライブやり放題エリア」や「路上パフォーマンスOKエリア」のような場所を作つてあげると、「秋田県はこんなに開かれた県なのか」というイメージにつながるのではないかと思った。

また、お祭りのことを取り上げていただきたい非常にありがたい。多くの小学校で、地域の文化を学ぶ取組として行われていると思うが、学校側がより積極的に取り組めるように後押ししていただくことで、地域の年配の方々も張り切ることができ、ますます活躍の場が広がると思う。

●和田部会長

そのとおりであると思う。花輪ばやし開催日の8月19日には、普段の花輪の町とは全く

違い、信じられないほど多くの人が集まる。

年配の方がよく「こういう若者がずっとここにいてくれればいいのに」とおっしゃる。それだけ祭りに魅力を感じているということである。夜通し盛り上がるその活気を、もっと継続的に地域に還元するようなことを考えなければならないと感じており、学校でも様々な取組がなされていると思うので、もっと推進してほしいと願う。

ほかにあるか。

○長谷川委員

提言(2)の二つ目ポツにある「社会教育施設」という言葉だが、先ほどA1で調べたところ、その定義に美術館は含まれていなかった。社会教育施設は博物館や公民館、図書館などとなっており、美術館が含まれるかは分からぬが、県への提言があるので、言葉の定義はきちんと確認された方が良いかと思う。

また、この提言内容は非常に良いと感じて拝見していたが、最近の公共的な建物は、図書館であれ、博物館であれ、美術館であれ、必ず地域との関わりを持てるようなスペースを作っている。学校も同様である。

一つの用途に留まらず、他の展開に発展させる余地を必ず残しており、それを使わない手はないので、是非、行政の立場から、そこをうまく活用するプログラム作りのような仕掛けを盛り込んでいただければと思う。

そうすることで、地域の建物が活性化し、それが教育の拠点となり、良い方向に向かうのではないであろうか。

□内田生涯学習課長

まず1点目の社会教育施設の関係であるが、博物館施設の中に美術館は位置づけられているはずである。博物館という括りの中に含まれているという認識である。

また、委員がおっしゃるとおり、美術館や博物館といった社会教育施設は数が多いわけではないので、そこを活用しながらどのような地域を創っていくかという視点が重要である。文化の振興もあれば、コミュニティ形成のために出向くことも、来てもらうこともある。

今回、多くの御意見をいただいたので、どのような形が可能か、教育庁内でもしっかりと検討し、様々な視点で取り組んでいきたいと考えている。

課題は多いかもしれないが、様々な方の御意見も伺いながら対応させていただく。

○長谷川委員

こうしたプログラムをうまく回せば地域との関わりが深まり、良い仕掛けになるとを考えている建築家が多いので、そこをうまく刺激していただけると、もっと盛り上がるかと思う。是非、よろしくお願ひする。

●和田部会長

ほかによろしいか。

それでは、提言 1 から 4 までを通して、全体を御覧いただき、補足するような点があれば願う。

○清水専門委員

最初の提言についてであるが、A I などの新しい技術は、学校で積極的に使っていくという方向性でよろしいか。例えば、中学校までは A I 禁止といったことではなく、どんどん使っていくという方向で進めていただきたいと考えている。

学校では未だにスマートフォンを持ってくるなというが、むしろ授業中に単語をスマートフォンで調べてみなさいというくらいまで進めてほしいと願う。

●和田部会長

では、現状とこれからの考え方について、義務教育課長から説明をお願いする。

□伊藤義務教育課長

タブレット端末が 1 人 1 台導入され、授業の中でも文房具のように活用していくということで、使用頻度は高まってきており、また、「秋田の探究型授業」の中にどのように効果的に生かしていくかという点での研究も進んでいるところである。

ただし、生成 A I の活用については、まだ国のガイドラインを市町村や学校レベルまで周知した段階であり、教育委員会や学校が組織的に「このように使っていきましょう」という方針を固める段階には至っていないのが実感である。

一部の先生方が、公務の効率化や教材研究の中で活用しているということが調査結果からも見えている段階である。

子どもたちに生成 A I を活用させていく際には、やはりガイドラインにもあるように、安易な活用によるデメリットも踏まえながら、活用の効果を上げていくという視点が重要であり、これから研究していくかなければならない部分であると考えている。

現在は、試しながら良い方法を創出し、少しずつより良いものを目指していくという段階にあると御理解いただければと思う。

●和田部会長

よろしいであろうか。ほかにあるか。

それでは、ここまでとしたいと思う。様々な意見が出されたので、事務局でこれから整理していただき、提言書をまとめていただきたいと思う。

皆様に諮るが、提言の最終的な構成、提出後の手直し作業については、部会長に一任いただくという形で御承諾いただきたいが、いかがか。

(各委員から了承を得る)

●和田部会長

それでは、部会長専決事項とさせていただく。もし、大きく項目が追加・削除されるような場合には、隨時、報告させていただくので、よろしくお願ひする。

それでは次に、その他として、委員の皆様から何かあるか。よろしいか。

(特になし)

それでは、私から御礼の言葉を述べさせていただきたいと思う。

委員の皆様には、専門的な知見を数多く御提供いただき、これから秋田県が向かうべき教育の方向性について、多大な御提言をいただいたと感謝している。

毎回、事務局と打ち合わせを重ねてきたが、予定調和ではなく、委員の皆様から出された御意見をそのまま生かすという方針で進めてきた。そのため、網羅的ではないかもしれないが、重点的に取り組んでほしいという思いが積み重なった提言書になってきていると思うので、是非、この提言を生かしていただければと願う。

現代の教育が抱える課題は、いわゆる「適応課題」、つまり探究すべき課題であり、こうすれば良いという正解がすぐに見つかるものではない。

しかし、今回、様々な話し合いを通していただいたこの提言は、適応課題ではありながらも、最適解を目指すための鍵にはなるものと信じている。どうかそうした視点でこの提言書を捉えていただき、一步でも二歩でも、秋田の教育が豊かなものになるよう願っている。

私自身のことでは恐縮であるが、自分が生まれてからこれまでを振り返ると、成長と共に社会がだんだんと豊かになってきたと感じており、良い時代に生きてこられたと思っている。

では、今の子どもたちはどうであろうか。彼らが、自分が生きてきた中で「本当に豊かにならなくてはいけない」という実感を、自分自身と社会に対して持てているかどうか。

もしそうでないとしたら、自分たちで未来を創出していくという気概のある子どもを育てていかなければならない。そういう意味で、大変貴重な意見交換ができ、建設的な提言になったと感じている。本当に感謝している。

それでは、進行を事務局にお返しする。

6 教育次長挨拶

7 閉 会